

2023年5月14日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

イザヤ書 64 : 5

ヨハネによる福音書 15 : 1～5

「感謝の実」

(ハイデルベルク信仰問答 問 62～64) ※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【前奏】

【招詞】 ローマの信徒への手紙 12 : 1

【祈祷】

【聖書】 イザヤ書 64 : 5、ヨハネによる福音書 15 : 1～5

【説教】 「感謝の実」

<信仰によってのみ>

毎週、主の日の礼拝では、ハイデルベルク信仰問答に即して、聖書の御言葉を聞いています。先週は、聖書を通して教えられる、わたしたちのプロテスタント教会において、最も大切なことを聞きました。

それは、わたしたちは「ただイエス・キリストを信じる、まことの信仰によってのみ、神の御前で義とされる」、ということです。「信仰によってのみ、義とされる」。

これを、もう少しかみ砕いて言うと、わたしたちを罪から解放して下さったイエスさまの救いを、わたしたちはただ受け取るだけ、受け入れるだけで、わたしたちは罪人であったのに、その罪を赦されて、神さまの御前に正しい者として、喜ばれる者として、立つことが出来るということです。

神の御前に義とされる。それはつまり、わたしたちは、神さまの御前に、義ではなかった。正しい者ではなかった、ということです。

わたしたちは、命を与え、愛し、養い、守って下さる神さまに背き、神さまから遠く離れて、自己中心的に生きる罪人でした。神さまに喜ばれる歩みをする義なる者、正しい者ではなく、神さまを怒らせ悲しませる、不義に生きる者でした。

このような神さまに対する自分自身の罪を、わたしたちは自分の力で償うことが出来ません。なぜなら、造り主であり、全知全能なる神さまに背く罪は、あまりに深刻で、あまりに重く、わたしたちが自分の命を差し出しても、全く足りないほどの罪だからです。

しかし、そのわたしの罪を、神さまは、ご自分の御子イエスさまの十字架に負わせられました。そして、このイエスさまの命による贖いによって、わたしの罪をすべて赦して下さる、というのです。

そして、罪人のわたしを神の子とし、神さまと向き合っ、神さまと親しい関係をもって、神さまと共に生きる者として下さる、というのです。

この、イエスさまによって与えられる罪の赦しを、わたしたちはただ、受け入れることしか出来ません。しかし、わたしたちが、そのように神さまが差し出して下さる救いを、ただ受け取る時。神さまは、わたしを正しい者として認めて下さる。「よし」として、受け入れて下さる。それが、ただ信仰によって、神の御前に義とされる、ということなのです。

<何かしたい>

わたしたちは、自分の力では、救いを得ることは決してできません。罪人であるわたしたちは、自分の罪を赦してもらうために、自分で何をする事も出来ません。

だからこそ、神の御子イエスさまが、まことの人となってこの世にきて下さり、わたしたちのすべての罪をご自分が担い、わたしたちが償いきれない罪の裁きを引き受けて、ご自分が十字架に架かって死んで下さったのです。

イエスさまが、わたしたちを救ってくださいました。イエスさまにのみ、救いがあります。

この、イエスさまの与えて下さる救いを、わたしたちはただ、受け取るだけ。差し出して下さった救いを、感謝して、大切に、心から喜んで受け取るだけです。

でも、なぜかわたしたちは、その救いの恵みを、ただ受け取るだけ、ということが、中々出来ません。

それは、なぜなのでしょう。ギブアンドテイクに慣れてしまっているのでしょうか。自分には、何か出来るはずだ、と思いたいのでしょうか。

…わたしたちが、神の御前に義とされることのために、何一つできない、ということは。わたしたちが全く神さまに従うことのできない、どうしようもない、悲惨な罪人だ、ということ突きつけられることです。そして、救われるために、罪人のわたしは何もできず、全く無能である、ということ、自分で認めなければならない、ということです。

自分の中に、救われるための要素が何もない。より頼めるものが一つもない。これは、わたしたちを、とても不安にさせます。わたしたちは、自分が具体的に手にしているものや、実感できるものに、確かさを感じるからです。

しかし、罪人であるわたしたちは、自分の外に、救いを求めなければなりません。自分の中に確かなものが何もないことを認めて、神さまこそ確かなお方であることを認め、神さまの救いの御手に、自分を完全に委ねなければならないのです。

<善い行いは役に立たない？>

でも。人は、良いことだってできるし、何もしないよりは良いはず。多少なりとも、努力や頑張りが、わたしを救いに近づけるのではないか。多少でも、良い人間になることで、少しは神に近づけるのではないか。そんな思いが、人間の内にはあるようです。

これだけやったから、安心。これだけ努力したから、大丈夫。これだけポイントを稼げば、何かしらの良い報いがあるはず。人は、そう思えるような、自分で何かを得た、という確かさを求めているのかも知れません。

今日のハイデルベルク信仰問答は、そんな思いや、疑問に答えています。しかも、とても厳しめに、はっきりと答えています。問 62 を見てみましょう。

「問 62 しかしなぜ、わたしたちの善い行いは、神の御前で義またはその一部にすらなることができないのですか。」

…この質問の前提は、わたしたちの善い行いが、神の御前で、義またはその一部にすらなることが出来ない、ということを示しています。

ここで注意すべきなのは、わたしたちが善い行いをするのが、悪いことであると言っているのではもちろんないし、人間には善い行いなんて何もできないんだ、と言っているのではありません。善い行いは善いことですし、それは神さまも喜んで下さるはずで

先に、問 63 を見てみますと、こんな問答になっています。

「問 63 しかし、わたしたちの善い行いは、神がこの世と後の世でそれに報いてくださるというのに、それでも何の値打ちもないのですか。」

「答 その報酬は、功績によるのではなく、恵みによるのです。」

聖書には確かに、神さまが、わたしたちが神さまに従って行う善い業を、喜んで下さる、報いてくださる、というところがあります。この世におけるわたしたちの行いも、神さまのために為すことならば、神さまはそれを受け入れ、喜び、祝福して報いて下さいます。

でも、その報いさえ、わたしたちが善いことをした功績として、つまり、頑張って貯めたポイントと引き換えに、神さまが報いを与えて下さるのではないのです。その報いさえも、ただひたすら、神さまの恵みによって与えられるものなのです。

そもそも、わたしたちが、自分の何かによって、神さまから恵みを得ようとする。神さまと、何か取引が出来ると考えていることが、もう違っているのです。

わたしが何事かを為す時にも、その力を与え、導いて下さるのは、神さまですし、与えられるものは、すべて神さまの恵みによるのです。

その上で、さらに「わたしの善い行いを、神がさま喜び、報いを与えて下さること」と、「わたしの善い行いが、救いの根拠になること」とは、まったく違うことなのです。

神さまは、わたしたちの善い行いに、恵みによって報いて下さいます。喜んで下さいます。

しかし、救いにおいて、わたしたちの善い行いが、わたしたちを救う助けになることは一切ありません。救いにおいては、わたしの善い行いは、何の値打ちもありません。「わたしたちの善い行いは、神の御前で義またはその一部にすらなることができない」からです。

<救いはただ受け取るだけ>

ここで、信仰問答が強調しているのは、どのようなわたしの善い行いも、神さまから救いを得るためのポイントにはならない、ということです。

わたしが成すどのようなことも、わたしの罪を償い、わたしが救いを得るために、少しも、一部も、役立つことは出来ない、ということです。

問 62 に戻って、その答えにはこうあります。「答 なぜなら、神の裁きに耐えうる義とは、あらゆる点で完全であり、神の律法に全く一致するものでなければなりません、この世におけるわたしたちの最善の行いですら、ことごとく不完全であり、罪に汚れているからです。」

わたしが罪を赦していただくために、善い行いをするなら、それは神さまに、完全に喜ばれるものでなければなりません。神さまの望んでおられることに、神さまの御心に、完全に一致しなければなりません。

でも、わたしたちは何をしても不完全です。そして、どんなに最善のことは行なったとしても、どこかに自分勝手な思いや、罪の思いが入りこんでしまいます。

だから、わたしたちが自分の罪を贖うために、自分の善い行いでそれを埋め合わせることなど、自分の善い行いで自分を救うことなど、まったく不可能なことなのです。

思えば、わたしたちの罪は、神さまの御心に完全に従うことがお出来になるイエスさまが、十字架に架けられて死ななければ償えないほどの、罪だったのです。

そして、神の裁きに耐えうる義、神さまに認めていただける善い行いとは、地上を歩まれたイエスさまのように、神さまを愛し抜き、隣人を愛し抜き、自分に敵対する者を赦し、御言葉に十字架の死に至るまで従い抜く。そのようなことを言うのです。

わたしたちの「善い」と思っていることと、神さまが「善い」とされることは、レベルがあまりにも違いすぎます。神さまの義を、わたしたちが自分で得ることは不可能です。自分を救うための善い業など、まったく何もできません。

わたしたちの救いは、神さまの義をいただく道は、ただイエスさまにしかないのです。

ですからわたしたちは、救いを、このイエスさまに頼るしかないのです。イエスさまは、わたしたちのために、ご自分の命をもって神の義を獲得して下さり、それをわたしたちに差し出して下さいました。

わたしたちは、何の見返りも求められていません。ただ、愛によって、憐みによって、それは差し出されたのです。

わたしたちは、ただ、それを受け取ることしか出来ません。しかし、この神さまの救いを、イエスさまが与えて下さる神の義を、ただ受け取る、ということが、まずわたしたちに出来る最も「善い」ことなのです。神さまの救いを、恵みを、愛を受け取ることこそ、神さまがまず、わたしたちに求めておられることであり、喜んで下さることなのです。

そしてそこから、わたしたちは、罪を赦された者として、神さまに愛された者として、今度は神さまのために、神さまに喜ばれようとする歩みが、新たに始まっていくのです。

<批判の声>

さて、これほどまでに、わたしたちはイエスさまが与えて下さる救いを、神の義を、ただ受け取るだけ。善い行いは自分の救いのために何の助けにもならない。そう言われたら、当然、次のような疑問が沸き上がってきます。問 64 です。

「問 64 この教えは、無分別で放縦な人々を作るものではありませんか。」

信仰によってのみ、救われる。善い行いがなくても、救われる。

それなら、善い行いなんか全くしないで、やりたいことをやって、罪を犯して、めちゃくちゃな行いをしている、救われるというのか。善い行いなんて意味がないなら、「無分別で放縦な人々」、何の見境もない、自分勝手な、傍若無人な人たちばかりになってしまうのではないか。そういう批判です。

これは、宗教改革の時に、プロテスタント教会が「信仰によってのみ義とされる」ということを主張したとき、各方面から寄せられた批判の声です。

なぜなら、それまで教会は、イエスさまを信じる信仰と、善い行いをしなければ、救われない、と厳しく教えてきたからです。それが、本当は聖書は、善い行いは救いに一ミリも役立たない、と言っている。ただ信仰によってのみ義とされる。そう告げていると教えられたら、戸惑ったり、反感を覚えたりするのは当然のことでしょう。

これに、ハイデルベルク信仰問答は、問 64 で次のように答えています。

「答 いいえ。なぜなら、まことの信仰によってキリストに接ぎ木された人々が、感謝の実を結ばないことなど、ありえないからです。」

わたしたちは、善い行いによらない、ただ信仰によってのみ救われる、と教えられた時。そこで、どれほど自分が深く罪に捕らわれているか。どれほど深刻な悲惨さの中を生きているかを、教えられたはずなのです。

そして、わたしたちが与えられた神の義、救いは、ただ簡単にポンと手渡されたものではありませんでした。

それは、どうすることも出来ないわたしたちのために、父なる神さまが、愛する御子を十字架につけてまで、わたしたちに与えて下さった神の義でした。

それは、神の御子イエスさまが、まことの人となり、弱く、小さく、貧しくなり、あらゆる苦しみを受け、侮辱を受け、血を流し、叫び、呪いの十字架の死を死なれることによって、そこまでご自分を犠牲にして下さって、わたしたちを救うために獲得して下さった、神の義でした。

神の義を受け取るとは、この神さまのわたしたちへの愛を、わたしたちへの思いを、わたしたちのために成し遂げて下さったことを、受け取るということなのです。

このイエスさまの命がけの救いを受け取りながら、神さまの愛を受け入れながら、神さまの御心を見捨て、無分別で放縦な歩みをするなど、果たしてできるでしょうか。

まことの信仰によって、神さまの愛によって、神さまの真実によって、罪から救われたわたしたちです。そしてわたしたちは、この救いを受け入れ、洗礼を受け、十字架と復活のイエスさまと、聖霊によって一つに結ばれたのです。そうして、わたしたちは、イエスさまの中に浸されて、イエスさまの体に接ぎ木されて、イエスさまの体の一部とされたのです。

そのような者が、「まことの信仰によってキリストに接ぎ木された人々が、感謝の実を結ばないことなど、ありえない」。信仰問答はそう語ります。

<感謝の実としての善い行い>

わたしたちの「善い行い」は、わたしの救いのために、なされるものではありません。

わたしは、ただ信仰によってのみ救われた。だから、わたしたちは、その救いに感謝して、喜んで、神さまに喜ばれるように歩むことを願うようになり、感謝の実をみのらせて、「善い行い」へと促されていくのです。

今日の新約聖書、ヨハネによる福音書 15 章は、イエスさまが話された「わたしはまことのおどろの木、あなたがたはその枝である」という有名な箇所です。もう一度読んでみます。

「私はまことのおどろの木、私の父は農夫である。私につながっている枝で実を結ばないものはみな、父が取り除き、実を結ぶものはみな、もっと豊かに実を結ぶように手入れをなさる。私が語った言葉によって、あなたがたはすでに清くなっている。私につながっていないさい。私もあなたがたにつながっている。おどろの枝が、木につながっていないければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、私につながっていないければ、実を結ぶことができない。私はおどろの木、あなたがたはその枝である。人が私につながっており、私もその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。私を離れては、あなたがたは何もできないからである。」

ここでわたしたちは、「実を結ばないと取り除かれてしまう、頑張ってイエスさまに繋がっていないければ！」と思わなくても、大丈夫です。

イエスさまは、3 節で、「私が語った言葉によって、あなたがたはすでに清くなっている」と言って下さっています。これは、弟子たちに、教会に、語られた御言葉です。すでに、イエスさまが救って下さり、イエスさまに結ばれて、聖くされている者たち、イエスさまのものとされている者たちに、イエスさまが、「あなたは、わたしに繋がっているのだから、わたしが、あなたに実を結ばせる」。そう言って下さっているのです。

枝は、それだけ一本ポツンとあっても、どこからも水や栄養を得ることが出来ないで、枯れてしまいます。

でもイエスさまに接ぎ木されたなら、その枝はイエスさまという幹にしっかりとくっついて、イエスさまから溢れるほどの恵みが流れてきて、豊かな実を結ぶようになるのです。

枝が自分で頑張っ、実を結ぶのではありません。枝は、木に繋がっていることによって生かされ、そして、実を結ぶことが出来るのです。それは、とても自然なことです。

イエスさまは、そのように、私に結ばれているあなたは、必ず、実を結ぶことが出来るのだ。そう約束し、宣言して下さいなのです。

まことの信仰によってキリストに接ぎ木された人々が、感謝の実を結ばないことなど、ありえません。イエスさまに結ばれたわたしたちが、実を結ばないことなど、ありえません。

幹から栄養が流れてくるほどに、それは、わたしたちが神さまの御言葉を絶え間なく聞き、その愛をますます知り、その恵みをますます味わうほどに、わたしたちは感謝に溢れ、豊かになり、喜びが満ちて、たわわに実っていくのです。

わたしたちの「善い行い」とは、救いのために必死に行くものではなく、自分の中から出てくるものではなく。ただ恵みによって救われ、ただ信仰によってイエスさまに結ばれた者が、たくさんの恵みを受けて結ぶ「感謝の実」なのです。

感謝の実が、わたしたちの日々の生活の中で、ますます豊かに実を結びますように。

【お祈り】 天の父なる神さま。御名をほめたたえます。

ただ恵みによって、イエスさまがわたしたちの罪を贖って下さり、ただ信仰によって、神さまがわたしたちをその救いに与らせて下さることを、感謝いたします。

わたしたちは、どれほどの神さまの愛を受けて、憐みを受けて、罪から救われたか。どれだけイエスさまの命が、恵みが、わたしたちに注がれて、神さまを礼拝する、新しい命に生かされているか。そのことを改めて覚えます。

どうか、イエスさまに一つに結ばれたわたしたちが、神さまからの愛と恵みと祝福によって、感謝の実を豊かに結ぶものとされますように。神さまを愛し、隣人を愛し、イエスさまの救いの恵みを証する日々となりますように。

そして、一人でも多くの方が、この救いの恵みを知り、ただ信仰によって、イエスさまの救いを受け取り、イエスさまに接ぎ木され、共に実り豊かな枝とされますように。

いつも豊かな恵みを注いで下さる、救い主イエスさまの御名によって祈ります。アーメン

【讃美歌】 5 2 1 「とらえたまえ、われらを」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 2 4 「たたえよ、主の民」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン